

## 【一般口演5】 第14席

## 『難經集註』の虞注について

宮城 浦山 久嗣

『王翰林集註黄帝八十一難經』5巻（以下『難經集註』という）は、『難經』における三国から北宋までの、4ないし5種類の古注を集めたものであり、南宋期には既に成立していたと思われる。

中でも虞庶注は、『郡齋読書志』（1250）に、

虞庶注『難經』五巻：右、皇朝虞庶注。庶仁寿人。寓居漢嘉、少為儒、已而棄其業、習醫術、為此書、以補呂楊所未盡。黎泰辰（案、瞿鈔本『通考』有「治平間」三字。先謙案、『後志』旧鈔有。）為之序。

とある如く、虞庶注『難經』5巻に基づいたものと考えられる。

また『難經俗解抄』（室町末？）には、

又有『十家補註黄帝八十一難經』、第一序、承議郎守尚書屯田員外郎前知三泉県兼管句兵馬橋道勸農事騎都尉賜緋魚袋黎泰辰撰、治平四年端午序之。……巨宋陵陽草萊虞庶再演。

とあり、治平4年（1067）に虞庶注『難經』が成立し、その黎泰辰序が『難經集註』の巻頭に添付されていたことが判る。この黎泰辰序は現行の『難經集註』にはないが、『難經本義』（1361年）の難經彙攷に、

宋治平間、京兆黎泰辰序『虞庶難經注』云、「世伝『黄帝八十一難經』、謂之難者、得非以人之五臟六腑隱於内、為邪所干、不可測知、唯以脈理究其彷彿邪。若脈有重十二菽者、又有如按車蓋、而若循雞羽者。復攷内外之症、以參校之、不其難乎」

とあることから、その一部を窺い知ることができる。

発表者は昨年まで、本学会において3回に亘って『難經集註』の諸注についての報告を行ってきたが、本発表もそれに続くものである。